

語りのすごさと現代の語り普及システム

医療分野の歴史に残る質的研究の大事業

大田原キャンパス 佐原まち子さん

ディベックスジャパンの裏話をじっくり聞かせていただいた。優しい射場講師の語り口調はアロマセラピーの研修のようなほんわかした優しい語りだった。

しかしその中身は、高みを見据えて「日本の中でなんとかがんの体験者の語りを広く紹介する仕組みを作りたい」、と思う有志の壮絶な活動が紹介された。そしてそのモチベーションの高さに圧倒された。

本当にこれだけのことを数人でできたのだろうか。

現代の PC の技術が後押しするとはいえ、やはり人が膨大な語りのデータをコントロールし、語りの中からコード分類をしなければならない。50 人の語りは文字データに落とし込み、最小限違和感がないような修正をし、映像とともに語ってくださった協力者それぞれにチェックしてもらうという手間ひまのかかる作業にも驚いた。50 ページに及ぶ語りになったものもあるという。思いと志だけで貫くことができたとしても、これはやはり日本の医療分野の歴史に残る質的研究の大事業の一つだと思った。

ディベックスは英国から手法を学びシステムができています。医学の世界では語りが着目されることが新鮮であり、研究手法としても量的研究が中心の世界であるからまだまだ質的研究方法がこれからという状況である。

しかしさてよ、日本の中でも歴史に残る語りの偉業はあった。柳田國男や宮本常一など民俗学の世界ではやはり膨大な民衆の語りを求めて、日本中を高速道路や新幹線のない時代に民衆の中に入りこんだフィールドワークの実践があった。宮本常一は今でいえばホームレスのようなぼろぼろの出で立ちで、話を聞く人々の家々に泊まり歩きながらの研究であったと読んだ。その膨大な研究成果が世の中に出ている。民俗学の語りは、平成の現代においてその価値を評価され、新しいブームになっている。

私の好きな絵描きの一人である齊藤真一の越後ごぜ日記にでてくるごぜの語りの記録も民俗学ではないがすばらしい語りの記録である。

手法は英国に学んだ今回のディベックスではありますが、日本にも民衆に沿った語りの検証があったことを改めて再認識し、疾患を中心とする医療分野の中で、当事者である患者一人一人の体験からくる語りに焦点を当てたこのディベックスが、役立たないはずがない。現代のやり方で PC を活用した語りの世界が、さらにさらに発展成功していくように応援するひとりにならなければならないと思う。がんばれーディベックスジャパン